

あるところで「巻き舌はあごの筋肉を使う」ということを聞いた。それについてすぐ思い浮かべたのは、最近のフランス語は「巻かない」ことである。グルングルン巻いているのはエディット・ピアフやシャルル・アズナヴールである。もちろん個人差はあるが、おそらく現在 70 歳位から上の人は巻いているのではないかと思う。それは世界的に若い人のあごの筋肉が弱くなったことと無関係ではないような気がする。それでも日本と違って堅い肉を食べるフランス人の巻き舌が減ったのはどういう傾向だろうか？因みにドイツ語の「母(Mutter)」は、昔は「ムッテル」で今は「ムッター」と発音する。「雄猫(Kater)」は、昔は「カーテル」で今は「カーター」である。共通語の英語が浸透したグローバル化の一環であろうか？言語も時代と共に変わってきて、特有の巻き舌が減少しつつあるように思う。因みに英語は巻きすぎると通じない。

そこで私は考える「巻くべきか、巻かざるべきか、それが問題だ」例えば古い時代の歌を歌う時はどうする？当時の発音でいく？現代の発音でいく？もちろんフランス語で巻いたからといって通じないわけではない。しかし巻かなかったからといって通じないわけでもない。ただ日本では巻くほどに褒められる。しかし私にとって巻き過ぎほど違和感を覚えることはない。日本人の極端な巻き過ぎはスパゲッティをズルズル食べる音を連想させる。それだったら巻かない方がきれいだ。何でもかんでも巻けばいいというものでもなさそうだ。大体都会の方が生活のテンポが速いせい言葉の発音は速く、パリでは「ボンジュール」が「ボジュ」、ウーンでは「グリュースゴット」が「グスゴッ」くらいの速度で聞こえるが、彼らはその中できちんと巻いている。けれど短いから汚く聞こえない。イタリア語においては「さようなら(Arrivederci)」の「アッリヴェデルチ」が「アリヴェデルチ」くらいに詰まって聞こえる程度で、ほとんど変わらないように思う。そこで「きれいな巻き舌」のために私が有効だと思うのは片仮名表記の速度を上げて読むこと。巻くところを抜かすことなく早口にしてみると、そこに口の構造上無理のない自然な音の流れがあることに気付く。そのとき「言葉は音楽だ」と思う。そしてイントネーションも意識すること。このイントネーションであるが英語の場合の「できる(can)」の否定形「can't」は語尾を発音していない。けれど彼らは何故わかるかというイントネーションなのである。やはり音の強調箇所は重要である。巻き舌も大事だけれどこの辺りも抑えなければならない。

さて、それではシャンソニエではあまり巻き過ぎないとして、大劇場ではどうだろうか？という提起をするのは、最近二期会のオペラ「メデア」を観たのであるが、ドイツ語否定語の「Nicht(ニヒト)」の最後が思いっきり「トゥッ」と目立った。客席にあれだけに聞こえるくらいであるから歌っている方は相当あごの筋肉を使っているということになる。同様にイタリア語の場合も巻き舌を強調するというが…。シャンソン・フランセーズの場合はあごの筋肉をいつもより多く使って巻き方を強調する必要があるだろうか？ない、と私は思う。何故ならオペラは「言葉」を歌い上げて感情を直接的に伝えて進行する劇であり、シャンソン・フランセーズは平均 3 分半という短時間完結の「詩」の中にある感情を伝達するドラマであるから。ハッキリした声ならば通常の強度で充分。そこで気付いた。クラシックの歌手が歌うシャンソン・フランセーズに違和感を覚えるのは、あごの使い過ぎにあるのかもしれない。(2012.11.18)